

# 蛙のドラマトウルギー

## 草野心平と宮沢賢治の表現方法と世界観

大塚 常樹

草野心平は生前無名だった宮沢賢治の『春と修羅』（一九二四）に衝撃を受けて「銅鑼」同人に誘い、その死後も賢治全集の編集に長く携わった。心平と賢治は精神的な兄弟関係にあった。実際両詩人共に蛙がその文学の中心的な役割を果たしている。しかし表現方法や背景にある世界観は大きく違う。草野の蛙の詩は豊饒な生命力の讃歌であり、対象に即した言葉・表現へのこだわりからその表現方法自体が大胆な生き方の表明でもあった。

まずは草野の大胆な表現方法を見ていくことにしよう。

る世界観をみてみよう。

蛙はでつかい自然の讃嘆者である／蛙はどぶ臭いプロレタリアトである／蛙は明朗性なアナルシスト／地べたに生きる天国である（『第百階級』）

みんなの孤独が通じあふたしかな存在をほのぼの意識し。／うつらうつらの日をすごすことは幸福である。／この設計は神に通ずるわれわれの。／侏羅紀の先祖がやつてくれた。／（中略）地上の動物のなかで最も永い歴史をわれわれがもつてゐるといふことは平凡ではあるが偉大である。

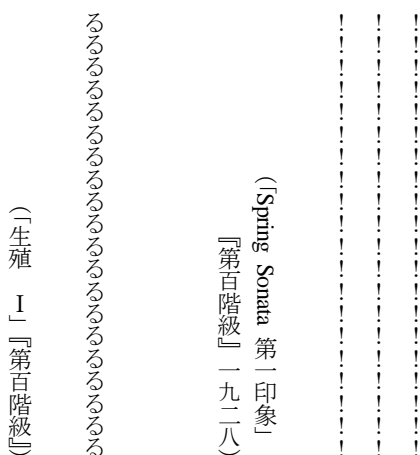
（「ごびらっふの独白」『日本砂漠』一九四八）

草野に於ける蛙は、大自然の摂理を体現した原始的な動物であり、生命進化の頂点にたつ人間を支配階級とすれば弱肉強食の下層にいる土まみれの無産階級そのものである。しかしながら、数一〇〇万年の歴史しかもたない人間に比べれば、侏羅紀から生き続けているたかな動物である。そして蛙は互いに補助しあひながら自然と共生し、長い時間を生き抜いてきた逞しい農民の姿そのものなのだ。

一方宮沢賢治においては、蛙は仏教的な世界観の中で、性欲や修羅意識と結び付いた忌避すべき存在であった。次の詩は妹トシの死後の行方を追い求める思考過程で賢治が見た悪夢（蛙に転生した妹が蛇に食われる夢）である。

《ギルちやんまつさをになつてすわつてゐたよ》  
《こおんなにして眼は大きくあいてたけど  
ぼくたちのことはまるでみえないやうだつたよ》  
《ナーガラがね 眼をじつとこんなに赤くして  
だんだん環をちひさくしたよ こんなに》  
（「青森挽歌」）

仏教徒の賢治にとって、生命は永遠に六道（上位から、天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄）を輪廻転生し続ける。だとしたら信仰の強い同志でもあった妹トシ



前者は蛙・オタマジャクシの泳ぐ様子を強調符「！」による視覚イメージである。後者の「R」音は、音の触感と平仮名の形状が蛙の姿態や粘着性をイメージさせ、また「るるる」の連なり形状によって、ゼラチン質状の卵が連なる蛙の卵の、質感表現と視覚化の両方を表現したものだ。文字の視覚利用は前衛芸術に特徴的な手法である。



（「冬眠」『第百階級』）

こうした大胆な表現をもたらす草野の蛙の背景にあ

が人間より上位の天上に生まれ変わるかそれとも下位の畜生に落ちたかは、自分たちの信仰の善悪が判断されることでもあったから、妹が蛙に生まれかわる夢は悪夢以外の何物でも無かった。

チュンセはキャベズの床をつくつてゐました。そしたら土の中から一ぴきのうすい緑いろの小さな蛙がよろよろ這つて出て来ました。／「かへるなんざ、潰れちまへ。」チュンセは大きな稜石でいきなりそれを叩きました。／（中略）チュンセがとろとろやすんでゐましたら、（中略）ポーセがしもやけのある小さな手で眼をこすりながら立つてゐてぼんやりチュンセに云ひました。「兄さんなぜあたいの青いおべべ裂いたの。」（「手紙四」）

蛙に生まれ変わった妹を殺してしまう兄の姿は、「青森挽歌」で蛙を食べる蛇の悪夢に対応している。しかし妹が畜生に生まれ変わるとしてもそれがなぜ蛙なのだろうか。賢治作品では蛙は春の季節の動物としてその性欲との関係がクローズアップされている。

まっ黒な土があたゝかにしめり湯気はふくふく春のよこびを吐いてゐました。／一疋<sup>ひきがへる</sup> 蟻がそこをのそのそ這って居りました。若い木霊はギクツとして立ち止まりました。それは早くもその墓の語を聞いたからです。  
「鶉<sup>とぎ</sup>の火だ。鶉<sup>あお</sup>の火だ。もう空だつて碧くはないんだ。／桃色のペラペラの寒天でできてゐるんだ。いゝ天気だ。／ぼかぼかするなあ。」

若い木霊の胸はどきどきして息はその底で火でも

燃えてゐるやうに熱くはあはあするのです。（中略）「それでも、つちでも、くさのうへでもいちめんいちめん、もゝいろの火がもえてゐる。」

（『若い木霊』）

賢治にとっては、性欲は宗教に近似したものの、宗教を墮落させる魔の意識であった。

じぶんとひとと万象といつしよに／至上福祉にいたらうとする／それをある宗教情操とするならば／そのねがひから砕けまは疲れ／じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと／完全そして永久にどもまでもいつしよに行かうとする／その変態を恋愛といふ／そしてどこまでもその方向では／決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を／むりにもごまかし求め得ようとする／この傾向を性欲といふ  
（「小岩井農場」）

賢治がたった一人の妹の死後の行方に執着すればするほど、妹は賢治の性欲（個人への道理に背く執着）によって、蛙という悪趣に落ちてしまうものなのだ。

#### 《参考業績》

『宮沢賢治 心象の宇宙論』（朝文社 一九九三）岩手日報賢治賞授賞／『宮沢賢治 心象の記号論』（朝文社 一九九九）／『日本のアヴァンギャルド』（世界思想社 二〇〇五）／『コレクション現代詩』（桜楓社 一九九〇）